

【信仰と愛のわざ～東日本大震災に寄せて～】

『ヨハネの手紙第一』3章13節～24節

茅ヶ崎同盟教会牧師・熊谷 徹

(2011年3月27日・礼拝説教)

【初めに】東日本巨大地震発生：

あの日、3月11日・金曜日、午後2時46分。私と家内は大船のあるビルの4階にいました。突然、ビルが揺れました。揺れは段々激しくなり、立っているのが危険な状態になりました。しゃがみ込んで柱にしがみつきました。初めて体験する激しい揺れでした。誰かが、「テレビをつけて！」と叫びました。「テレビが倒れた！」という声が返って来ました。しばらくして電気が消えました。生れて初めて体験する地震でした。

揺れが少し収まったので、窓から外を見下ろすと、大勢の人がビルや家から飛び出して話している様子が見えました。道路を見ると、交差点の信号は消えて、自動車が長い列を作って立ち往生していました。誰かがアイポッドか何かで情報を入手し、教えてくれました；「東北の方で物凄い大きな地震が発生したらしい！」と。揺れが収まってきたので、信号のつかない道路を自動車でも慎重に走って帰りました。ラジオをつけると、想像を絶する大地震らしいということが分かって来ました。帰宅してテレビをつけました。どのチャンネルも地震一色でした。

その後、凄まじい被害状況が明らかになって来ました。悲劇をもたらしたのは地震の後に襲った巨大な津波でした。津波で家が流されてゆく映像が繰り返し放映されました。現実とは信じられないような光景でした。「中尊寺が破壊された」と報じるのを聞いて胸騒ぎを覚えました。子供の頃、夏休みになると毎年のように泊まりに行っていた母の実家からそう遠くない場所だからです。心配になり電話しましたが全く通じません。ようやく通じたのは5日目でした。電話に出た従兄弟の「全員無事」と言う声を聞いた時はホッとしました。いまだに電話が通じない人がいるそうですが、さぞかし心配で不安でたまらないことでしょう。

その後、事態は更に深刻さを増しました。原子力発電所が危険な状況に陥りました。今、必死の作業が行なわれています。息子の知人もその現場にいます。誰もが息をひそめて成り行きを見守っています。そういう中、先週水曜日、東京の水道水から基準値以上の放射性物質が検出されました。生後8ヶ月の孫はミルクで育てられていますから水が不可欠です。息子は勤務を終えて帰宅する途中、ミルク用の水を買おうとしました。どの店も1本も置いてありませんでした。赤ちゃんのいる親達が一斉に買いに走ったようです。誰もが不安なのです。

被害はとてつもなく甚大です。死者・行方不明者は2万7千人以上。避難生活を送っている人は20万人とも言われます。経済的ダメージは20兆円とも30兆円とも言われます。3週間前には誰も想像していなかったことです。

今も余震が続いています。誘発地震も発生しています。ただでさえ不安なのに、アメリカの著名な地震学者が、「今後 M8クラスの大地震が起こる可能性があるから嚴重に警戒せよ」と言ったそうです。誰もが不安になってしまいます。

そういう中でも、暖かな空気が流れ始めています。「被災者のために何かをしたい；被災地のために何ができるのだろうか！何かをしたい！という思いがあちこちから起きています。日本だけではありません。世界中から、「日本と日本人のために何かしてあげたい・何かをしよう！」という動きが起きているのです。中国では、津波に襲われた中国人留学生20人を助けて津波に呑みこまれた日本人のことが感動を与え、「日本のために何かをしよう」という動きが起きているそうです。

私達にも被災者のために何ができるはずです。被災地のために何ができるのかを考え、小さなことでも良いから自分にできることをしたいと思うのです。「なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です」と聖書は告げています(ヤコブ4:17)。問題は、「なすべき正しいこと」とは何なのか、今私達に何が出来るのか、何をしたら良いのか？…それがハッキリと見えてこないのがつらい所です。それでも、と言うよりも、それだからこそ、「なすべき正しいこと」が何なのかを祈り求めつつ、自分にできることをして行きたいと思うのです。

【1】命を捨てる愛(3:16)；

1)『ヨハネの手紙・第一』の著者は伝統的には「使徒ヨハネ」だと言われています。ヨハネは「愛の使徒」とあだ名されるように「愛」を強調しました。彼は、晩年をエペソで過ごし、エペソで亡くなりました。エペソの教会で晩年の彼が説教したのはいつも愛の教えだったそうです。高齢になり歩けなくなったヨハネは、弟子に背負われて教会に来て毎回このような説教をしました；「我らの主イエスはこう言われた；『私があなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい』と。神を愛し、人を愛せよ、これがすべてだ」。ヨハネはこの段落でも「愛」を強調し、8回も「愛」とか「愛する」という言葉を登場させています。ヨハネの最愛の言葉、それが「愛」でした。そして、彼が言う「愛」とは「父なる神の愛」であり、「主イエス・キリストの愛」であり、そして、「その愛に生かされる人の愛」なのです。

2)ヨハネは16節前半でこう言います；「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。」。

これはキリストが十字架に死なれたことを指しています。「私達のために」とは、「私達を救うために」という意味です。キリストは私達を罪と滅びから救うために「ご自分のいのちをお捨てになりました」。キリストはそれほどまでに私達を愛して下さったのです。キリストが私達のためにご自分の命をお捨てになったことによって「私達に愛がわかったのです」。神の愛、キリストの愛が、どんなに深く尊いものであるかが、愛に疎い私達にも「わかった」のです。

3)次にヨハネは16節後半でこう言います；「ですから私たちは、兄弟のために、

いのちを捨てるべきです。」。

①三浦綾子さんの小説『塩狩峠』は実際にあった出来事を素材にしています。小説のモデルとなったのは、長野正雄というクリスチャンの鉄道員です。婚約者に会うために彼が乗った列車が、塩狩峠を越えた時、暴走し始めました。ブレーキも利きません。このままでは列車は谷底に転落し、乗客は全員死んでしまうと判断した長野青年は、自分の体にありったけの毛布を巻きつけ、線路に身を投げ出して、暴走する列車をくい止めました。乗客は全員、救われました。今も、北海道の塩狩峠には、彼の「愛のわざ」を後世に語り伝える記念碑が立っています。

③ところで、「命を捨てる」とは、長野青年のように文字通りに「命を捨てる」ことでしょうか？ 勿論、私達のような平凡な人間にも、長野青年のように、文字通り「命を捨てる」という極限的場面が来ないとは言えません。ですが、それは極めて特殊な場合です。なぜなら、私達の命は一つしかなく、文字通りに「兄弟のために命を捨てる」ということは人生でたったの一度限りのことだからです。兄弟が3人いたら、「3人の兄弟のために命を捨てる」ということは、3人を同時に救うという場合以外は、一人の人間では不可能だという理屈になります。弟のために命を捨ててしまったら、後に残された妹のために命を捨てるということは不可能です。もう死んでしまったのですから。そう考えると、「命を捨てる」とは「文字通りの意味で命を捨てる」ということではなさそうです。

「命」と訳されたギリシャ語「プシュケー」には「自己、己れ(おのれ)」という意味があります。ですから、ヨハネのこの言葉は「兄弟のために己れを捨てるべきである」とも訳せるわけです。勿論、16節前半の「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました」と言う場合の「いのちをお捨てになりました」は、文字通り「命を捨てた」のです。そのキリストの死によって「愛」が明らかにされたのです。その犠牲の愛を知った者は、今度は、他の人のために愛を惜しみなく与えるべきなのです。そのことをヨハネは、「命を捨てるべきだ」と言ったのです。「キリストは私達のために命を捨てて下さった！せめて私達は己れを捨てて愛そうではないか」と。

④まことの愛とは、無私の愛、己れを捨てて愛する愛です。その極限が、愛する人のために自分の命を捨てることなのです。そして、そのような愛の源は、キリストの十字架の愛にあるのです。キリストの十字架、そこに愛があるのです。十字架に死なれたキリスト、そのお方こそ、まことの愛のお方なのです。

【2】憐れみの心を閉ざすな(3:17)；

①次に、17節でヨハネはこう言います；「世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまってい

るでしょう。」。

「困っているのを見ても」の「見る(セオーロー)」という言葉は、単に「見る」のではなく、「じっと観察する。熟視する。注意深く見て判断する」という言葉です。つまり、「相手がどれだけ困っているかを十分知っていながら」ということです。

②「あわれみの心」と訳された言葉はギリシャ語の「スプラクナ」という言葉で、原義は「内臓、はらわた」です。日本にも激しい怒りの感情を表す時「はらわたが煮えたぎる」と言ったりしますが、古代ユダヤ人も「内臓；はらわた」には人間の深い感情が宿っていると考えました。そこから「はらわた」という言葉は「愛情」とか「深い同情心」とか「憐れみの心」を指すようになりました。

主イエスは「あわれみの心」を説明するために、有名な「良きサマリア人のたとえ」を語られました。エリコ街道を歩いていたユダヤ人の旅人が強盗に襲われ、大怪我を負いました。その時、ユダヤ人と敵対関係にあったサマリア人が通りかかり、倒れている彼を介抱し、宿屋に送り届け、宿屋代などを負担したという話です。その譬え話の中に「あわれみの心」という言葉が動詞形で登場します。『ルカの福音書』10章33節と34節を読んでみます；「33 ところが、あるサマリア人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、34 近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。」。今お読みした33節に「かわいそうに思い」という言葉がありました。これが「あわれみの心」の動詞(スプラクニゾマイ)です。この譬え話を語った後、キリストは、「あなたも行って、同じようにしなさい」と言われました(ルカ10:37)。

③ヨハネは「あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう」と言います。これを逆に言えば、「神の愛がとどまっている人は、憐れみの心を閉ざしはしない」です。愛とは他者に向かって「憐れみの心を開く」ことです。「開かれた憐れみの心；深い同情心」からは自然と「愛」が流れ出て来ます。そして、その愛が、その人を「愛のわざ」へと駆り立てるのです。キリストの生涯がまさにそうでした。

【3】行ないと真実をもって愛そう(3:18)；

①さて、ヨハネは18節で、「あなたの愛を行動で示しなさい」と命じます；「18 子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもって愛そうではありませんか。」。

②明治時代、吉田清太郎というキリスト者がいました。彼の愛唱聖句は、『コリント人への手紙・第一』13章でした。「愛の讃歌」と呼ばれている素晴らしい箇所です。そこにこう歌われます；「たとい、山を動かすほどの完全な信仰を持って

いても、愛がないなら、何の値うちもありません。…愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。愛は決して絶えることはありません。…こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です」。

この聖書の御言葉に動かされた吉田は、牛乳配達をして得た収入で、同志社のある貧乏学生を1年間支えました。その学生は彼の愛に感じ、学問に励みました。それと共に、吉田の信じる基督教に惹かれるようになりました。同志社を出たその学生は、後に基督教伝道者になり、多くの人をキリストに導き、日本の近代化に大きな影響を与えました。日本救世軍の創設者・山室軍平です。

③本当の愛は、ただ単に「ことばや口先だけ」のものではありません。それは「行ないと真実」をもって愛する愛となり、行動する愛となって現われるものです。キリストが示された愛が、まさしく「ことばや口先だけ」の愛ではなく、「行ないと真実をもって愛する」愛であり、行動する愛でした。その極致が十字架だったのです。

【結】「信じよ、愛せよ」(3:23)；

①最後に23節をお読みします；「神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。」。

ここでヨハネは「神の命令」として2つのことをあげています。一つは、「御子イエス・キリストの御名を信じる」こと。もう一つは、「キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うこと」です。即ち「信仰」と「愛のわざ」の2つです。この二つが「神の命令だ」とヨハネは言うのです。

ところが、ここをギリシャ語原文で読むと、「神の命令」と訳された言葉が単数であることに気付かされます。即ち、ヨハネにおいては、「キリストの御名を信じること」と、「互いに愛し合うこと」とが一つのことと見なされているのです。「信仰」と「愛のわざ」とが一体化されているのです。

これは、『ヤコブの手紙』2章17節のこの言葉と同じです；「信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです」。

また、『ガラテヤ人への手紙』5章6節とも相通じるものがあります；「キリスト・イエスにあっては、割礼を受ける受けないは大事なことでなく、愛によって働く信仰だけが大事なのです。」。「愛によって働く信仰」(ガラテヤ 5:6)と、信仰が生み出す「愛のわざ」は、切り離せないのです。

②「己れを捨てて愛する」という無償の「愛のわざ」が認められてノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサがこう言いました；「最大の悪は、愛の足りないこと、神から来るような愛の足りないこと。すぐ近くにいる隣人が、貧しさや病気に脅かされていても、無関心でいることです」。「無関心でいる」とは、「憐れみの心」を閉じるということです。マザー・テレサは、「憐れみの心を閉ざすことは、最大の悪です」と言いたいのです。

③聖書は、「愛は神から来る」と告げます(1ヨハネ4:7)。そうであるならば、神から愛を与えて頂かねばなりません。何よりも、私達のために十字架に死なれたキリストを見上げて、キリストから愛をいただきましょう。そして、主から「あわれみの心・深い同情心」を与えて頂いて、自分にできる「愛のわざ」を行なう者とさせていただきましょう。

聖書はこう告げています；「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだでないことを知っているのですから。」…『コリント人への手紙』第一、15章58節。◇